

となりのイエス

[聖書] ヨハネによる福音書 19章 17～24、28～30 節

イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。しかし、ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取ってみたが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、「彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた」という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。(17～24 節)

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。(28～30 節)

[序] あなたにとってイエス・キリストとは？

先日 FEBC の仕事で、ある普通の信徒の方のインタビューの録音を編集していたのですが、とても心にとまる一言がありました。インタビューを受けた方は女性の方ですが、20 年ほど前にご家庭での大きな悩みがあり、その時、もう、すぎるような思いでご自分から教会に飛び込んで来られた方でした。

そして、その時まで、周りからの冷たい言葉に絶望的な気持ちになっていたのですが、思い切って教会に行った時、その教会の人たちが本当に普通に温かく迎えてくれたそのことに深い安らぎを覚えて、「私も神様を知りたい、キリスト教って何なのかを知りたい！」との思いを与えられ、約一年後に「私を救って頂きたい！」という気持ちで洗礼を受けられたという方です。

それが約20年前のことで、それから教会生活もずっと継続されています。インタビューがその方に尋ねました。「今あなたにとってイエス・キリストとはどういう方ですか?」。—皆さんだったらどうお答えになるでしょうか。その方の答えはとてもシンプルなものでした。「私の罪の贖罪者、救い主です」というような神学用語など全く使わないでこうお答えになりました。—「そうですね、いつも私のとなりに居てくださる方かな」、と。とても実感のこもっている言葉で、私は感動しました。ああ、この方は本当にイエス様との親しいつながりに生きている方なのだなあ、と思いました。

[1] 自ら十字架を背負われる主イエス

キリスト教にとって一番大切なものは何かといえば、**主イエスの十字架と復活**ですね。いわゆる**教会の信仰告白**の要です。そしてこの十字架と復活というのは、不思議なのですが、時と場所を超えて、今の私たちを、私を支えるものとなります。それこそイエス様が、頭での理解ではなく、本当に身近な者となって「**いつもとなりに居て下さる方**」になるのです。神様の恵みによって。聖霊によって。

今日から、**主イエスの受難の最後の一週間(受難週)**を過ごします。今日の聖書箇所は、正に主が十字架を背負って前進し、そしてゴルゴタの丘でローマの兵士たちによって十字架につけられ、息を引き取られるという描写がありました。私たちは今日のような十字架の場面を読んで、イエス様への“同情者”になってはいけないと思うのです。「ああ、気の毒だ。痛ましいことだ」と思ってしまいやすいのですが、それではイエス様は私たちと遠い人になってしまうのです。映画や演劇を鑑賞するかのような、傍観者になってしまうと思います。

今日の箇所で私たちが注目しなければならない言葉は、「**イエスは自ら十字架を背負い…**」という言葉です。わざわざ「**自ら**」と書いてあります。他の福音書では十字架を担いだ人は他にもいるのです。キレネ人のシモンという人がその十字架を背負った(背負わされた)という記事がマタイ、マルコ、ルカ福音書に残っています。この行きずりの外国人は無理やりに、たぶん疲れきっていたイエスに代わって十字架を担がされたのだと思います。それ自体大きな出来事で、メッセージがあると思いますが、ヨハネ福音書には全くその描写は無いどころか、「**イエスは自らが**」と強調しているのです。どうしてでしょうか?

ヨハネ福音書は「**十字架の時**」というのを、**神様が独り子イエスに与えられた使命が成し遂げられる時**として、重要視しています。主イエスが「**一粒の麦**」として死んで地に落ち、そのことによって救いの実が全世界に広がってゆくことを、ヨ

ハネは既に「時」として描いていました (12:24)。ヨハネが描くイエス様は、受難の場面でも、**前を見据え、堂々としています**。18章の箇所でも、主を捕えようとする者たちに「あなた方は誰を捜しているのか？…それはわたしである」と言うと、その者たちは後ずさりして地に倒れたとありましたよね。この**迫力**です。イエス様は、**父なる神様の使命を貫徹する覚悟を決めていらっしゃるのです**。

「**イエスは自らが十字架を負い**」。—この十字架の道に行くのはシモンではない、人間ではない、わたしなのだ、という**イエス様の決意の大きさ、揺るぎなさ**がこの一句にはあるのではないのでしょうか。

思えば、あの最後の晩餐の前に主は弟子たちの足を洗われましたが、「私の足など決して洗わないでください」と言い張ったペトロに主は、「**わたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる**」とおっしゃいましたよね (13章)。わたしがあなたを愛し、赦していることのあるし、この洗足はそういう意味なのだ。そして、あなたという存在がどれほど神様の目に尊い存在であるのか、それを示すために、わたしは十字架への道を歩むことをやめないのだよ、とヨハネ福音書は語ってやまないのだと思います。

[2] わたしたちにはこの独り子が与えられている

イエスの十字架とは、全く**理不尽極まりない**刑罰です。ピラトでさえ「わたしはこの男に何の罪も見出させない」(18:38)と言ったのです。けれども、遂に「十字架につけよ」との声が圧倒的に勝って、この神の独り子は、結局、言わばなぶり殺しになったのです。

しかし、驚くべきことに、これが神様の御計画であったというのです。ヨハネ福音書は要所要所で「それは聖書が実現するため」と記します。(今日の箇所でも24、28節にあります)。旧約聖書に示された神様の約束、メシアを遣わすという御計画の実現が、この十字架のイエスのお姿に現されているのです。先ほど交読文で唱和した**イザヤ書 53章**の預言の言葉 (全部が重要ですが) に、「彼は屠り場に引かれる小羊のように」とか「多くの人の過ちを担い、多くの者のために執り成しをしたのはこの人であった」と預言されているように、主は正に、この**過ぎ越しの祭**の時に、神様が備え給う犠牲の小羊となって、その命を献げられたのです。何ゆえでしょうか？聖書は申します。あの**ヨハネ 3:16**です。「**神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。ひとり子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである**」。つまり、この独り子の十字架ゆえに、私たちの中に、——罪の中に滅びても当然である私たちの中に——**永遠の命、神の命が始まっている！**というのです。このことを知る時、イエスは、遠い方ではありません。この

方は、あなたといつも共に、あなたがどんなに不安でも、また、弱さや罪に押し潰されそうになっても、あなたと共に、いや、あなたに代わって、その不安も、罪も全部“背負って”下さり、あなたの人生の歩みを、あなたのとにりにいて、一緒に歩いて下さるのです。御国に至るまで、離れずに。

[結] われらの救いは「成し遂げられた」

最後に、一つの歌の詞をご紹介します。これはバツハが作った『ヨハネ受難曲』の中の 32 曲目なのですが、イエス様が「成し遂げられた」「すべてが終わった」とおっしゃって息を引き取られた所から作曲された歌の歌詞です。

これは、この 19 章 30 節の、「成し遂げられた」「すべてが終わった」という、イエス様の十字架上の言葉が何を伝えてくれているのか、それを一番良く、また深く教えてくれる言葉だと思います。

私の尊い救い主よ、このように問うことを許し給え。
あなたは今、十字架にかかれ、ご自分で言われました。「成し遂げられた」と。
そのことで、私は死から解き放たれるのでしょうか？
私は、あなたの苦しみと死によって、御国を受け継ぐことができるのでしょうか？
この世界のすべての者の救いは実現されるのでしょうか？
…あなたは今、苦痛のゆえに何も語れません。
しかし、あなたは語っておられます。
その首を下に垂れながら、無言のうちに「然り。そのとおりだ」と。

私たちもやがて一人ひとり違いますが、この地上最後の日を迎えます。その時もあなたは独りではありません。「となり」どころか、自ら十字架を背負われた主が、あなた自身をしっかり背負い、前へと進んで下さいます。そして、私たちの罪の一切を赦し、御国の約束の確かさを示して下さいに違いありません。

今のこの時代の不安や悲しみも、全ての悩み、辛苦を経験された主は知っていて下さっていることを信じます。

新型コロナウイルスも、言ってみれば長く続くと言っても、一時的なものでしょう。私たちは一時的なものに目を注ぐのではなく、永遠に続くものにこそ目を留め、互いに愛し合い、励まし合ってゆきたいと思います。そのような主にある交わりとして、今年度も歩ませて頂きましょう。

お祈り致します。